

11月29/30日 M-planet 「ウイルス ライブズ マター」

菊地奈々子

ウイルスと共生という視点が良かった。共生とは共に生きるということ。似たような言葉に共存というのがあるが、辞書で調べると、共生は「同じところで生活する」とあり、共存は同じ意味の場合もあるが「2つ以上のものが同時に生存・存在する」とある。確かに劇を見ると、同じところで人間とウイルスと一緒に生活している、やはり共生なんだと納得。私自身、職業柄、多文化共生という世界で生活しているが、共生の難しさは身に染みてわかっている。

全体に言葉のギャグが散りばめられ、思わず声を出して笑ってしまう場面が何度も。ところどころ役者の舌が早回りして聞き取りにくい点もあったが、演技と絡んでうまく表現され笑いを誘えたと思う。例えば、コロナが変異してコロス、コロシ?! 新しく出た薬がコロサレズって、言葉だけ聞いても笑えるところ、役者は真顔でセリフをしゃべり、必死で劇に没頭して作り上げている感じがすごく良かったし、ヒロインの高校生役は顔を真っ赤にして熱が出ている状況表現する、化粧でも何でもなく… (あとからインタビューした際、血流が上がっていたということだった。)

それからマスクをする十字架。もう一つのテーマに「誹謗中傷」がある。黒い衝立(おそらく壁、または外の塀)に白のマスクがたくさん。それは人々の口、口、口。うわさ話に花が咲く、殆どが人を責める口。最後の方で後ろにでかい十字架、でかいマスク。あれは、マスクを十字に切る、つまりウイルスをやっつけるのか、または人の口を封じるのか? いろいろな視点から劇が観られて楽しい。

登場人物の名前だが、女性の名前が2人同じような気がして、頭が? マークだらけになり、後からパンフを読むと、“命子””寧子””隸子”と3人の名前があった。うわあ、これって、わざと? どんな意図があるの? って考え込んでしまった。きっと作者の思惑があるに違いないが、観る側にとっては単純に違いの分かる名がいいかなと思った。

本題に戻ると……。人間と、人間の中に潜むウイルスとが、いつしか心を通わせ、いなくならないで、と恋う気持ちにまでなっていくというドラマだ。ウイルスがいつまでも人の中にいれば、その人は助からず、反対に人が生きるためにはウイルスはいなくならないといけない、そのジレンマを面白く芝居にしている、よくできた脚本だと思った。役者たちもその世界にどっぷりと感情移入し、その世界の人そのものであるように見え、熱演だった。挿入歌が場を和ませ、手作り感もあり、一息つける場となっていた。

舞台装置の可笑しみや役者たちの個性が光り、物語も起承転結、まっすぐ進み、ストーリーにいつしか惹きつけられていった自分がいた。まさにタイムリーな芝居だった。

*以前、コロナ禍だったと思うが、あるスペースでイベントとして、マスクに今言いたい言葉を書く(だったか?)、というのに参加したことがあった。あれ以来、この劇を構想してきたのかな、とふと思った。

はままつ演劇フェスティバル2025劇評

澤根 孝浩

M-planet

「ウイルス・ライブズ・マター」

2025/11/30 15:00-回

コロナ禍のような世界が再び訪れた時代の物語。「コロス」という『ウイルス同士の関係』、『地域社会で生きている人間同士』、『ウイルスが見える人間とのウイルスの関わり』の三つの要素により進められていく。コロナ禍を経験をしている世界だが、同じような醜さを見せる人間社会。成長のない人間社会を描かれていることが逆にリアルだと受け取った。それに比べて、ウイルスの純粋な目的とひたむきさの方が観客の心を惹きつける。人間よりも人間くさいウイルスのキャラクターたち。途中に入るオリジナルの歌も良い。なんだか懐かしさを感じるような笑いも良かった。

シンプルな舞台だが、動く（動かす）美術だったり、袖幕や照明エリアが多かったり、段取りに苦労しそうだ勝手に心配していた。客演の多い構成であるのにも関わらず、しっかりと一つ一つ成立させていた。これも客演を含めてだが、役者の演技がどの役も良かった。個性としっかりとした土台のある演技を見せてくれる役者がたくさんいた。2時間程度の上演時間だったが長さを感じず、観客を楽しませる力のある舞台だったと感じた。

M-planet ウイルス・ライブズ・マター (11月30日(日) 15:00~)

複数のはげ口を活かした奥行きのある舞台配置や、パネルを用いた噂や人の視線の可視化、布による感染表現など、発想としてとても面白く、演劇的な工夫が随所に見られました。舞台にははげができる箇所が複数用意されており、空間としての奥行きを感じられる配置になっていた点はとても良かったと思います。

特に、パネルを動かす演出や、大きな十字にマスクをつけた道具の出現などは視覚的にも強く印象に残りました。一方で、その奥行きのある舞台袖を十分に活かし切れていなかった場面もあったように感じます。全体的に直線的な移動が多く、立体的な動きや奥行きを使った見せ方がもう少しあれば、舞台空間の魅力がさらに引き出せたのではないかと思います。

照明については全体として効果的で、共生や星の話題の場面では緑、批難や対立の場面では青、という色の使い分けが作品世界の理解を助けていたように思います。ただし、めいこの友達が誹謗中傷に近い行動をとる場面で、青ではなく緑の照明が使われていた点については、意図が少し読み取りづらく感じました。ウイルスの存在が前面に出ている場面でもなかったため、「なぜこの色なのか」と考えさせられる瞬間でもありました。

音響については、序盤のカットインがやや唐突に感じられ、フェードインの方が世界観により馴染んだのではないかと思います。また、マイクや声の処理についても、左右や奥行きを使った定位を加えることで、不安感や気持ち悪さといった感情をより強調できた可能性があるように感じました。声がさまざまな方向から聞こえてくる、といった演出があれば、作品の持つ不穏さがより立体的に立ち上がったのではないかと思います。

演出面では、ウイルスとめいこの掛け合いや、研究員とのぞきさんのやり取りなど、コミカルな場面が非常にテンポよく展開されており、笑いどころでしっかりと客席が反応していたのが印象的でした。笑いが自然に起きていたことから、演出と役者さんの力がきちんと噛み合っていたことが伝わってきます。歌についても、クオリティが非常に高く、ハーモニーも含めて「入れる意味のある歌」になっていた点は素直にすごいと感じました。共生の歌を繰り返し登場させることで印象付ける構造も理解できましたが、初登場時にはやや唐突さを感じ、またフルで歌われた際には少しくどさを覚えたのも正直なところです。特に最初の登場時に、めいことウイルスたちが仲良く歌っている状況には戸惑いがあり、関係性の変化がより明確に見える構成であれば、納得感がさらに増したのではないかと思います。ただ、それだけの違和感を含めても、歌の技術力が高く、入れる価値のある表現であったことは間違いのないと思います。

暗転が多用されていた点については、特に序盤において、物語に没入する前に現実へ引き戻される感覚があり、少し惜しく感じました。場面が短い状態で暗転が続くことで、「また場面が変わるのか」という意識が先に立ってしまった印象もあります。終盤に向かって暗転が減っていった印象があったため、構成が逆であれば、これまでの情報を整理しながら物語の行方を待つワクワク感がより強まったのではないかと思います。また、暗転中に役者さんの姿がうっすら見えてしまう点も、集中が途切れる一因になっていたように感じました。

演技面では、特に先生役の存在感が際立っており、発声、動き、間、抑揚といった基礎の力がキャラクターを強く立ち上げていました。ふじみさんも雰囲気が非常によく、特に歌唱力の高さが印象に残ってい

ます。全体として歌のレベルが非常に高く、ハーモニーも含めて完成度が担保されていた点は大きな強みだと思います。役者さん自身が作詞作曲まで担っている点からも、技術力と表現への本気度を感じました。一方で、滑舌や基礎力にばらつきを感じる場面もあり、それがやや目立ってしまったのは惜しい点でした。

テーマである「共生」については、伝えたい意図は明確に感じられたものの、ウイルスと人間、しかも命を奪うウイルスとの共存という設定が、観終わった後に残るメッセージとしては難しさを孕んでいるように感じました。特に、めいこの友達がウイルスを恐れる行動自体は人間として十分に理解できるものであり、行き過ぎた部分はあるものの、その感情自体には正当性があったように思います。それが一方的に悪として描かれているように見えた点には、少し引っかかりが残りました。

面白さとメッセージ性の綱引きにおいて、娯楽性が前に出た分、共生というテーマの掘り下げが弱まってしまった印象もあります。脚本についても、展開上の都合を感じる部分がところどころにあり、めいことふじみが「一緒に生きていける」という結論や、母親の唐突な愛情表現については、もう少し積み重ねがあれば感情的な説得力が増したのではないかと思います。

総じて、非常に面白い演出や魅力的な掛け合い、役者さんの力を強く感じる場面が多くあった一方で、演出・脚本・テーマの噛み合わせについては、もう一步踏み込めたのではないか、という思いも残る作品でした。

好みの問題もあるかと思いますが、たくさん考えさせられる内容であり、同時に大きな可能性を感じる公演だったと思います。

「熊騒動」

(11/30…15:00 M-Planet 「ウイルス ライブズ マター」)

近年、日本だけでなく世界的に、「熊被害」が急増している。大きな熊もいるが、小さくても力は人より強い。自然界で生きるためには、その力が必要なのだろう。そんな熊が食料を求めて街へ降りてくる。熊も生き物、食料を食べなきゃ生きていけない。が、駆除されてしまう。環境の変化と言ってしまえば簡単だが、もともとの環境破壊が原因では？（ちょっと身勝手な人間だとは思ふ…）

人は、熊と違い、知恵や道具やいろんなものを使い、これまでも“食べるもの”を作り、生き延びてきた。畑を作り、作物を育て収穫する。罾を作り、獲物を狩る。

簡単そうに見えるものでも、多くの年月を経て今がある。

フグは、古代から食べられていたようで、江戸時代でも「てっぽう」と呼ばれ命がけで食べるものだったようだ。私達が安心して食べられるようになるまでには幾千人もが亡くなっている。

また、現在、ある“たこ焼き屋”では、物価や最近の蛸の価格高騰により、“たこ焼き”の具に“イカ”を入れたりしているようだ。（当然“イカ焼きです”とうたって販売している。蛸よりさっぱりしているそうだ。）

これらを、「進化」と言うかは分からないが、環境に“対応”はしていく。

何かを食べ（吸収し）生き延びることは、どこかでその対象を「コロス」ことになるかもしれない。

この芝居に出て来た「共生」という言葉は、ある意味“戦いの狼煙”のようにも聞こえた。相手に、そして自分に対しての戦い。芝居中に派手なアクションで“戦い”を見せたわけではないが、その苦しさは見えて来たように感じた。

「共生」しようとした“ウイルス”達は、思いに反して、宿主の“人間”を侵していく。宿主の生命を守るために自らを滅する“抗ウイルス薬”の摂取を促す。

「共生」を望んだ“宿主”は、「私も変異したら一緒にいられるかな？」と言ひ、苦しみながら“薬”を飲む。

我々人間は、“ひとりの人生”をひとつの何かの括りにとらえるため、“個”としてはあまりに弱く、「共生」より「排他」を選択する。小さな“ウイルス”達は、どれほど変異し、死滅し、バトンを渡し続けて来たのだろう。

とてつもない時間の流れと、現在生きている我々の傲慢さが身に染みる。

滝浪倫邦（オトナ青春団）

〈全項目 30 点満点で評価 22 点〉

受付から送出し…3/5

- ・受付開始が遅れたのは、仕方ないとしても、案内をもう少し早めに欲しかった。

舞台装置…4/5

- ・シンプルな暗幕と黒のパネルは、手作り感満載で良かった。
- ・動くパネルが効果的だった。
- ・上下の袖の高さがもう少し欲しかった。(パネルが隠れきれなかった)
- ・ラストにバック幕を振り落としたが、バックサスや水平的に後ろの効果がある訳でもなかったし、音やヒモで、「現実」になってしまったのは残念。

照明、音響効果…4/5

- ・暗転時の段取りだろうか、少し長い時があった。
- ・パネルの移動時に「カラカラ」音が気になった。
- ・盛り上がりの BGM が、少し懐かしく思えた。

演出面など…3/5

- ・テーマ曲はあっても良いが、何回も出て来たのは、逆に少し耳障りになってしまった。
- ・パネルの表裏の作りものは、芝居に合っていた。
- ・小道具のバトンが良かった。
- ・舞台前面の芝居が多く、奥行きをあまり感じなかった。
- ・最後に出てきた大道具が中途半端な感じがした。

役者（個人）…4/5

- ・発声などの面で、個人差があった。
- ・動きがなくとも、役として舞台にいられたのは良かった。

役者（全体）…4/5

- ・やりとりや関係性が明確で、バランスも良かった。
- ・コンビネーションが良かった。
- ・歌のハモリがバラバラな感じがした。
- ・立ち位置とか気にしすぎだったかも。

まとめ

発想が良く、物語としてまとまっていた。その分もあって、役者も無理なく生きていたように感じた。人の弱さを感じた。歌がメインに据えられていたが、“クロス”ではなく、“個々”に歌っている感じがしたのが残念だった。